

板東俘虜収容所遺構の発掘

板東俘虜収容所の遺構について、徳島県の「県史跡」への指定、将来的には「国指定史跡」を目指して発掘調査が昨年から行われていました。それにいたる経緯については、前々号で鳴門市教育委員会の森さんに詳しく書いていただきました。発掘途中で分かったことは前号に少し書きましたが、2007年度の発掘作業は1月末でいたい終わりました。そこで、今回の発掘調査での発見と成果について、森さんとともに発掘作業に携わってこられた鳴門市教育委員会の下田さんに『ルーエ』への寄稿をお願いしました。

板東俘虜収容所跡の発掘調査

鳴門市教育委員会生涯学習課文化財担当
下田 智 隆

鳴門市教育委員会では、このたび収容所の発掘調査を行いました。今回の調査は、大正8年(1919)に俘虜が作成した収容所内の測量図をもとに、これに記載のある構築物について基礎遺構の残存状況を確認するために行いました。前号では、「ドイツ兵の慰霊碑」前の池に造られた石垣と、「第2給水所」が紹介されたので、今回はそのほかに調査を行った遺構についてお知らせします。

兵舎(バラック) 第5棟・第6棟

鳴門市ドイツ村公園「子供ひろば内」では、現在、公園施設として活用されている兵舎のレンガ積み基礎の平面規模および構造の確認を行いました。現在は、8棟あった兵舎のうち東側の4棟の一部が子供ひろば内に残存しています。調査によって、兵舎建物の東端部および中央部にあった出入口の遺構が見つ

かったことから、公園内には兵舎の全長72.9mのうち、その東側半分の約36mが残存することを確認しました。また、同じような構造の基礎・通路・出入口を、第5棟の北側に位置する兵舎第6棟でも確認しました。



第5兵舎跡

兵舎の基礎は、まず壁面の平面プランに合わせて地面を布掘りし、厚さ10cm程度の捨てコンクリートを打ちます。その上に、地上部の壁よりも広い幅になるようにレンガを2段積み、これが地中部の基礎となります。地上部の基礎は、レンガをイギリス積みで5段積み上げます。レンガ基礎上面には木材の土台を据えて、等間隔で埋め込まれたアンカーボルトに固定し、この上に柱などを構築していく構造になるとみられます。

屋内にはモルタル貼りの通路が残っています。各出入口および屋内の間仕切り部分の床には、角柱状の御影石が埋め込まれ、開き戸に付く軸金具や、落とし金具の受け穴、戸当りの段差などが彫り込まれています。また、床下の換気のために、レンガ基礎の部分には等間隔で換気口が設けられています。

ここで使用されているレンガの寸法は、平均値で22.5×10.5×6.5cmを測ります。これは、大正14年(1925)に定められたJES(日本標準規格—JS規格の前身)の規格寸法(21×10×6cm)とは異なるので、レンガ積み遺構は規格統一以前の大正時代の

所産と考えられます。このほか、刻印レンガも使用されており、レンガの製造所或いは製作者を示すものとみられます。

製パン所内の石窯、埋設土管

ドイツ村公園「子供ひろば」北側の林では、当時の測量図で「炊事場・浴場」「製パン所」と記載されている場所について調査を行いました。その結果、炊事場部分は明確な基礎構造物を確認できませんでしたが、製パン所は、石窯（レンガ積みのパン窯）および付属のレンガ積みの基礎や、モルタルを張った床面などが見つかりました。ここで使われているレンガの平均サイズも、JESの国内統一規格よりもやや大きめのサイズであることから、レンガ積み基礎は大正時代に作られたものと言えます。



パン窯跡

また、「日本人の造った石窯がよく壊れるので、ドイツ兵俘虜たちに設計・改修を行わせたい」という内容の旧陸軍の申請文書が残っていることから、俘虜自身による石窯の改修が少なくとも一度行われたようです。

当時の製パン所内を撮影した写真と見比べてみて下さい。石窯の奥行きはよく分かりませんが、窯の前に立つ俘虜と比べても、大きな窯であったことが解ります。ちなみに発掘された石窯は、南北4.6m、東西3.7mの長方形で、この南側に南北1.6m、東西1.7mの正方形に近いレンガ積みの部分が付属しています。この写真は、大正8年3月発行の『俘虜写真帳』に掲載されているものですので、改修前の石窯ということになります。現在のところ改修後の石窯を写した写真が見つかりませんので、どのような上部構造の窯であったかについては、もう少し検討してみる必要があるでしょう。いずれにしても、約1000名の俘虜が一日に消費する量のパンをここで焼いていたわけですから、今回発掘された基礎が、写真のような大きさの石窯であった可



製パン所内部

能性は高いといえます。

このほか、製パン所跡の南では、陶器製の埋設土管が東西方向に2本平行して延びているのを確認しました。このうち太い方は、主な埋設物の位置を破線で記している当時の測量図などから推測して、給水管として使われたものと考えられます。一方、細い管は製パン所からの排水管の可能性が高そうです。

「史跡」としての板東俘虜収容所

以上の調査成果から、収容所施設の配置や、当時の測量図に記されていない建物の内部構造などを知るための貴重な情報を得ることができました。今後も、同様の調査を継続していくと共に、当時の測量図やドイツ館に残されている写真・印刷物・絵画資料などと合わせて検討していくことで、収容所の具体的な姿や俘虜たちの生活の様子を明らかにしていきたいと考えています。

板東俘虜収容所は、第1次世界大戦当時、日本国内で開設された俘虜収容所の中でも、遺構が良好な状態で残っている国内唯一の「遺跡」です。このことは、本遺跡が「戦争関連遺跡」とであると共に、「外国人に関する遺跡」としても評価できるという点で、全国的にみても貴重です。もちろん、所内と地域との交流が当時活発に行われた事実も、歴史的に重要です。

したがって、本収容所跡は、日本が近代化していく過程を理解する上でも重要な史跡と位置づけることができます。既に県史跡となっている「ドイツ兵の慰霊碑」や「ドイツ橋」と、収容所に関連する文献等の資料も含めて文化財としての総合的な保護・活用を行なうため、「板東俘虜収容所跡」の国指定史跡化を目指していきたいと思えます。

徳島市内で催された 「和洋大音楽会」について

従来、徳島市でドイツ兵捕虜たちが演奏した音楽会としては、1919（大正8）年3月22日に催された「和洋大音楽会」が知られていました。そのプログラムは前号で紹介したとおり、洋楽と邦楽のほかに舞踊もあって、むしろプログラム内部に書かれているように「和洋大演芸会」でした。ところが最近、このほかにもうひとつ「和洋大音楽会」が催されていることが判明したのです。これは、徳島大学准教授の井戸慶治さんがドイツのフライブルク連邦軍事文書館でこのプログラムを発見されて分かったことで、その紹介を『青島戦ドイツ兵俘虜収容所』研究』第5号でされています。

それによると、1918（大正7）年6月2日に第一部長唄、第二部洋曲、第三部長唄の三部構成の「和洋大音楽会」が徳島公園内千秋閣で催されています。詳細は上述の研究誌をご覧ください。また、問題の第二部洋楽の演奏団体の名前としてあがっているのが「徳島俘虜演奏楽団」ですが、これでは板東俘虜収容所の2つの楽団、エンゲル・オーケストラなのか徳島オーケストラなのか分かりません。井戸さんの解説によると、プログラムの端に消えかかり、かろうじて判読できる程度ですが、MA.Kapelleと書かれているそうです。これは徳島オーケストラの別称です。というのは徳島オーケストラのほとんどは膠州海軍砲兵大隊（ドイツ語の略称でMA.K.）の兵士からなっていたからです。実は、この音楽会の前日はこのオーケストラによるベートーヴェン「第九」の日本初演の日なのです。つまり2日間でまったく趣を異にする曲目を演奏していたことになるわけです。それだけこの楽団が豊富なレパートリーを有していたことを示すわけですが、体力的にタフなことに感心します。というのも、当時板東から徳島まで移動するには途中電車に乗るにしても、かなりの距離を徒歩で歩かねばならず、それも重い楽器を運ぶ必要もあるからです。

ところで、ドイツ館所蔵の写真資料の中に従来「和洋大音楽会」の様子を写すものとして紹介されてきたものが数枚あります。ここにその中の一枚を掲載します。従来1919年3月、徳島市内の芝居小屋で開催されたものしか知られていなかったため、この写真もその時のものと

思われてきました。ところが、この時出演していた捕虜の楽団はエンゲル・オーケストラであったことやその時の演奏曲目などをつきあわせてみると、この写真はどうも辻褄があわないのです。

まず楽団員の衣服が3月の時期の演奏会にしては白く、奇異な感じを抱かせます。よくみると夏用の水兵服なのです。指揮者も水兵服を着ていて、それにかかなりの長身です。二回目の「和洋大音楽会」の出演団体であるエンゲル・オーケストラの団員が全員水兵服を着用しているとは考えられませんし、そのときの指揮者はエンゲルであったでしょうが、彼はそれほど長身でもなく、所属が異なっているので水兵服を着ることはありません。

写真の右端には演奏曲名が掲示されていますが、そこには「衛兵ノ行進」と書かれています。これは二回目の「和洋大音楽会」のプログラムにはありませんが、初回のプログラムには確かにあります。

このようなことから、この写真は1918年6月2日の「和洋大音楽会」の際のものであり、楽団は徳島オーケストラであること、指揮者はハンゼンであると判断されるわけです。会場は徳島公園内にあった千秋閣です。この千秋閣は明治末に皇太子（後の大正天皇）行幸の際の宿泊所として建てられた立派な和風建築物で、後年公会堂としても使用されていたものだそうです。

ドイツ館には数多くの収容所時代の写真がありますが、撮影場所と時期、とりわけ時期を示すメモはほとんど付記されていません。場所についてはある程度まで同定ないし推測のつくものがありますが、時期を見きわめることはなかなか難しいのです。今回のものは、新発見の史料によって双方が同定可能となった少ない例と言えるでしょう。



和洋大音楽会の捕虜楽団

ドイツ館所蔵資料紹介

徳島オーケストラ第5回演奏会

前号で紹介したように、エンゲル・オーケストラ第1回演奏会のプログラムはドイツ館の所蔵資料の中にあります。これに対し、徳島オーケストラ（後にMAK.オーケストラと改称）のプログラムは残念ながら、この第5回以降しかありません。第4回まではもともと発行されていないか、それとも単に未発見なのかは不明です。演奏曲目は表に書かれ、裏は白紙です。内容は次のとおりです。



演奏会プログラム

徳島オーケストラ 第5回コンサート

板東、1917年6月10日

■演奏曲目

- | | |
|---------------------------------|----------------|
| 1 青島の戦士 行進曲 | パウル・エンゲル |
| 2 歌劇「白衣の貴婦人」序曲 | ボワエルデュ |
| 3 歌劇「サムソンとデリラ」から「あなたの声に私の心は開く」 | サン=サーンス |
| 4 交響曲第9番より「歓喜に寄す」 | L. ファン・ベートーヴェン |
| 5 楽劇「ワルキューレ」から「ヴォータンの別れ」と「火の魔法」 | R. ワグナー |

最初の行進曲の作曲者としてあがっている「パウル・エンゲル」は、同じ板東収容所内のエンゲル・オーケストラの指導者です。第4曲目には1年後日本初演されることになる「第九」

交響曲の有名な「歓喜の歌」が取り上げられています。これはその前年1916年8月に演奏したものと同じでしょうが、具体的にどのような編曲であったのかは不明です。

演芸の夕べ（第1回）

板東収容所での娯楽演芸会は幾度か催されましたが、これはその中の初回のもので、サイズは221mm×323mmで、ご覧のようにかなり縦長の版形です。このプログラムには制作者の署名が入っていません。写真ではかなり分かりづらいのですが、右に立つ女の靴のかかとの下に大文字のGとMを重ねたマークが見えます。これは収容所新聞『ディ・バラッケ』の編集部員でもあったグスタフ・メラの署名なのです。彼はこれ以外にも多くのプログラムのデザイン、制作にたずさわっています。さらに収容所新聞『ディ・バラッケ』の挿絵もいくつかこの署名があつて、彼の描いたものであることが分かります。



演奏会プログラム（表）



演奏会プログラム（裏）

このプログラムの表には1917年6月22日と23日と開催日が記されています。裏面には演目がかかれていますが、あらまし次のとおりです。

第一部

- 1 喜歌劇の行進曲 レオ・ファル
- 2 風刺歌「塹壕にほうり込め」
- 3 喜歌劇「音楽隊の娘」から二重唱「甘いワルツの歌」
- 4 喜歌劇「冗談男爵」から二重唱「小さな娘たち」
- 5 「ハインとテーチェ」

第二部

- 6 ワルツ「テソロ・ミオ」
- 7 風刺歌「収容所百景」
- 8 風刺歌「100マルクのコレット」
- 9 シュリーア湖カルテット
- 10 徳島の思い出
- 11 喜歌劇「冗談男爵」から「娘に旦那様ができたなら」
- 12 「新口メオ」、一幕喜劇

開演 8 時、天気が良ければ 6 月 22 日（金曜）から

ドイツ館主催のクリスマス会

鳴門市ドイツ館 清水 真由美

昨年 12 月 9 日ドイツ館のクリスマス会を行いました、約 100 人もの子どもたちが参加してくれました。

最初のクリスマスカード作りではみんな一生懸命で、それぞれに工夫を凝らし個性あるものができました。作ったカードはドイツ館のツリーに飾り、その後、クリスマスに届くようにそれぞれの自宅に送付しました。

この後、鳴門教育大ふれあいアクティビティーのメンバーとゲームや歌で遊んだ後、国際交流員のドイツ人の扮するサンタさんが登場。みんなにドイツのお菓子のプレゼントがありました。

最後は、お菓子の家作りでした。ドイツでは子どもたちがクリスマスにクッキーを焼き、クッキーでお菓子の家（魔女の家）を作ります。そこでドイツ館のクリスマス会では、家の形をした厚紙にドイツのビスケットやグミ、チョコレートなどを貼り付けたお菓子



カードを飾ったクリスマスツリー

の家作りにチャレンジしました。こどもの創造性とはすごいものですね。サンタさんが来るように煙突を作った家、庭の部分にドングリを貼り付けた家、窓から見える家の中を色紙で飾り付けた家など職員が準備するときには、思いもつかなかったような発想がありました。お菓子の家セットの中には、ドイツ館から大当たりプレゼントのゲーム D S ソフトが入っていました。

少し気が早いですが、2008 年のクリスマス会は・・・子どもたちの、あのキラキラした目に応えられるような、もっともっと楽しい企画を考えます。皆さんからのご提案も伺いたと思いますので、よろしくお願いいたします。



クリスマス会の様子

「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究会は、2003年以来毎年『研究誌』を発行してきました。今年も次の要領で原稿を募集いたします。

● 締め切り 2008年7月31日

※原稿の遅れは他の人の迷惑にもなりますので、8月15日を限度とします。
それ以後に到着したものは、次年度回しにさせていただきます。

● 投稿字数 7万字（1ページあたり40字×35行で50ページまで）を一応の限度とします。

● 投稿様式

コンピュータを使い、MSワード形式でファイルを作成してください。A4サイズで、1ページ40字×35行とし、フォントを「MS明朝体」、サイズ10.5ポイントに統一します。注は、脚注または最後にまとめるものとします。写真・図版などを挿入する場合は、なるべくそれを含めた原稿を作成してください。

● 協力費

研究会費は徴収しませんが、次の要領で協力費をお願いいたします。5ページ以下 1,500円、6～10ページ 3,000円、11～20ページ 4,000円、21～30ページ 5,000円、31～40ページ 6,000円、41ページ以上 7,000円。10ページ以下の投稿者には5部、11ページ以上の投稿者には10部を贈呈します。一般の販売価格は一部500円ですが、贈呈部数を超える部数が必要な投稿者は一部300円で購入できます。

● 送付先

次のメールアドレスのどちらかに、メールで添付ファイルとして送って下さい。
nfo@doitsukan.com（鳴門市ドイツ館）
tamuraichi@tuba.ocn.ne.jp（編集責任者、田村一郎氏）

■これまでの主な行事

- 2月4日(月)～24日(日) ドイツ観光とエコバック展
- 2月10日(日) 佐藤安津子・角泰志 ジョイントコンサート
- 2月16日(土) シオン ピアノソロコンサート
- 2月24日(日) ムジーク・イム・ラーガー（収容所の中の音楽）
鳴門高等学校吹奏楽部

■これからの行事予定

- （企画イベントにつきましては、変更する場合がありますので
ご確認下さい）
- 3月17日(月) 「訪日外国人受入接遇研修会」
 - 3月20日(木)～31日(月) 『戦争とドイツ平和村の子どもたち～
東ちづる絵本「マリアンナとパルーシャ」展』
 - 3月22日(土)・23日(日) 「ドイツ国際平和村」支援チャリティー
イベント
 - 4月6日(日) 第4回「イースター祭り」
 - 5月3日(土)～6日(火) ドイツワイン祭り

- 5月27日(火)～6月9日(月) 「第九」コンサート展
- 6月1日(日) ワインのタベ
- 7月6日(日) セタコンサート
- 8月13日(水)・14日(木) ドイツビール・ワイン祭り

👁️ あとがき

今年は冬前の予報に反して寒い日が多く、また普段の冬よりも雨が多かったように思われます。収容所遺構の発掘作業はこんな寒い冬の真っ最中に行われていました。ちょくちょく様子を見に行っていたのですが、風を遮るものもない、凍えるような戸外での作業、つくづく大変な仕事だと感じました。今回は、森さんとともに発掘に当たってこられた下田さんにその成果についての寄稿をお願いしたところ、快諾いただきました。

鳴門市ドイツ館では、博物館として行うべき特別展示や講演会のほかに、職員が中心となって独自のイベントをいろいろ行っています。今回は子ども向けのクリスマス会について、清水さんに報告してもらいました。（川上）